

# 東京都立光明特別支援学校における進路指導の変遷

○竹内博紀

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

安藤隆男

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 東京都立光明特別支援学校 進路指導 重度・重複化

## I. 研究の目的

本研究の目的は、肢体不自由教育を先進的に牽引してきた東京都立光明特別支援学校（以下、光明特別支援学校）における進路指導が、児童生徒の障害が重度・重複化する過程でどのように議論され、その目的・内容を変化させてきたのかを明らかにすることである。とりわけ、本報告では、高等部卒業後の進路状況及び生徒の実態の変遷に着目し、進路指導の教育課程上での位置づけを検討する。これは、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化が著しい近年の肢体不自由特別支援学校における進路指導、並びにキャリア教育を推進するための基礎的な知見を得るものである。

## II. 研究の方法

### 1. 対象校

光明特別支援学校の高等部を対象とした。選定の理由は以下の通りである。第一に、光明特別支援学校は日本で最初に設立された肢体不自由児に対する学校であり、以来わが国の肢体不自由教育を牽引してきた。その実践は、各年代の当該教育における先進的な取り組みであったことが想定できる。第二に、学校要覧、研究紀要等の資料が現在まで継続的に保存されており、生徒の実態や進路、進路指導の位置づけや内容の変遷について把握できるからである。

### 2. 時期区分

高等部において第一期の卒業生が出た1960年から2015年までの時期を、高等部卒業後の進路状況及び生徒の実態の変化を基準に4つに区分した（Table 1）。

### 3. 資料

資料は、進路状況及び生徒の実態、進路指導の教育課程上での位置づけの変遷を明らかにするため、学校要覧と研究紀要を対象にした。学校要覧は、1960年から2015年までの期間を用いるが、一部欠落している年度がある。

Table 1 光明特別支援学校高等部の進路変化による時期区分

第1期	1960年～1967年
第2期	1968年～1976年
第3期	1977年～1988年
第4期	1989年～2015年

## III. 進路状況及び生徒の実態

進路状況の変遷を検討するために、生徒の進路を、文部省及び文部科学省刊行の特殊教育資料及び特別支援教育資料における「卒業後の状況」の基準を参考にして、「進学者」、「教育訓練機関入学者」、「就職者」、「社会福祉施設入所者・通所者」、「その他」の5つに分けた。変化した時期を捉えるために、相対的に見て、障害が軽度と想定される「進学者、教育訓練機関入学者、就職者」を合わせたグループと、障害が重度と想定される「社会福祉施設入所者・通所者、その他」を合わせたグループの2つに分けた。1期・2期では「進学者、教育訓練機関入学者、就職者」のグループが多かったが、3期以降に「社会福祉施設入所者・通所者、その他」のグループが急激に増加した（Fig. 1）。また、「社会福祉施設入所・通所」と「その他」の比率は、はじめは「その他」が高いが、2期から3期にかけて逆転し、近年

は圧倒的に「社会福祉施設入所・通所」が高い割合を占めている。これは、社会福祉施設の整備といった物理的な側面に加えて、「在宅は、ともすれば最も価値の低い進路形態として迎え入れられる傾向にある」（文部省[1982]165）というように、できる限り在宅を避けたいという考え方が当時の社会に広まっていたことが考えられる。

生徒の実態の変遷は、生徒の疾患とADL（Activities of Daily Living）の自立度から検討をした。生徒の疾患は、肢体不自由の起因疾患として最も代表的な脳性まひの比率は2期から3期にかけて減少するが、他の神経性疾患の比率が増加している。特に、他の神経性疾患の比率は3期から4期にかけて増加しており、この時期に生徒の障害の重度・重複化に加えて、障害の状態の多様化が顕著に表れたことが示唆された。結果的に脳レベルでの疾患が全体に占める比率はわずかに減少するものの、依然として大きな比率を占めている。また、ADLの自立度は、2期から3期にかけて著しく低下しており、生徒の障害の重度・重複化がこの時期に表面化したことが分かった。

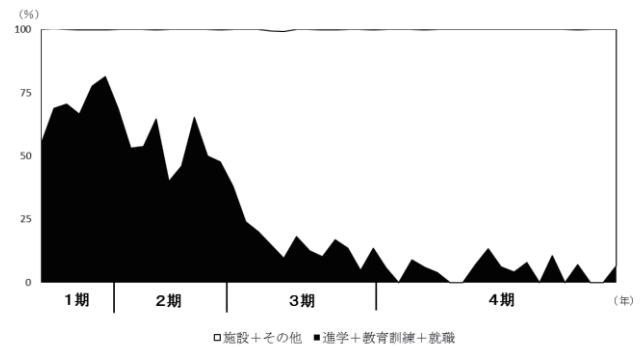


Fig. 1 光明特別支援学校高等部の進路変化（2分類）

## IV. 教育課程上での進路指導の位置づけ

生徒の障害の重度・重複化が、進路指導の教育課程上での位置づけにどのような影響を及ぼしたのかを明らかにした。教育目標のうち進路指導に関連する文章の用語の変遷をまとめた。教育目標は、1期から2期では、「職能的」、「職業能力」、「職業教育」、「学力」という進学や就職に関連する用語が使われている。3期では、「適性」、「適切な」、「能力適正」という一人一人の生徒の実態に応じることに関連する用語や、「学習」という広い意味での学びを示唆する用語が使われている。4期では、「学習活動全般」や「意識」、「豊かな」などの抽象的で広い解釈が可能な用語が、そして最近になると、生徒からの積極的な表出を意味する「主体的」という用語が使われている。用語の変遷から、1期・2期のような進学や就職を中心に目指していた時期から、3期・4期のような一人一人に応じた多様な進路を模索する時期へと変化したことが分かる。学級編制も時期を追うごとに多様な実態のある生徒一人一人に柔軟に対応する必要があり、各学年1クラス編制から、「進ずる教育課程・知的代替の教育課程・自立活動を主とした教育課程」のように柔軟な編制を実施するように変化した。

(TAKEUCHI Hiroki, ANDO Takao)